

森田正馬は日本における精神医学の草創期、大正時代に日本独自の精神療法「森田療法」を編み出し、神経症者の救済に顕著な実績をあげた在野の臨床医である。

森田によれば、神経症の根源にあるものは「死の恐怖」だが、思想でいかに遣り繰りしようと死が恐怖であることには変わりがない。死の恐怖は人間感情の事実であり「本然」である。この本然を認めるならば死の恐怖はそのまま恐怖である。恐怖に身を任せていれば変転きわまりない外界の変化に応じて流転する精神活動の中で、恐怖はやがて薄らぎ神経症に発展することはない。理知で自分を支

# 読書術の半歩遅れの



渡辺 利夫

配するのではなく、生命の自然発動にしたがって「あるがまま」に生きよ、と森

は事に仕えて対象と合一できる無二のものである。恐怖感情に囚われ活動を忌み嫌う症者にとにかく一つでも仕事を成し遂げさせ、抑鬱的な気分を抱えながらも何事かを成し得たという体験的な自信を与え、心身機能発揮の爽快を感じさせる。その反復により精神の

仕事による心身機能の発揚が神経症克服の要であることを悟らされ、療法の確立にいたる。人間にとって仕事かとも根源的な意味を考へ抜いて成立した療法である。森田思想の真髓が『神経質の本態と療法』(白揚社)である。最初の出版は昭和3年と古いが、版元を

なった遅くも人の好い農民であるイワン・デニーソフ・シューホフの物語である。収容所を囲むプロック塹を積み上げるだけの不条理で苛烈な強制労働だが、これに屈託なく立ち向かうシューホフの生気に満ちた一日を著者は鮮やかに描写している。旧ソ連邦の

## 森田正馬とソルジェニーツィン

## 仕事の意味を問う

田は諭す。神経症者の心の葛藤を「思想と事実の相反」の中に読み取ったことは森田の創見にちがいない。療法についてだが、森田は精神それ自体を治療の対象とは考えない。症者の精神の方位を「仕事」に向けさせるよう努める。仕事と

内界をみつめ煩悶の人生を過ごしてきた症者の「即我的」態度は、仕事という対象に向かう「即物的」態度へ、内向から外向へと変じる。森田は症者が仕事に没入して我を没却する時、症状は希薄化し消滅していることを幾度となく観察し、

変えて今も版を重ねる。ソルジェニーツィンの処女作に『イワン・デニーソフの一日』(木村浩訳、新潮文庫)がある。かつてドイツ軍の捕虜であったという咎で今度はロシアの強制収容所にぶち込まれ、8年間をそこで過ごすことに

の強靱性を、シューホフという名もない農民の生きざまに仮託して描こうというのが著者の真意なのである。そのことによって著者は人間にとって仕事のもつ根源的な意味を読者に深々と伝えているのである。(経済学者)